

# 主語叙述型結果表現：英語と中国語の対照

Terence SEAH

テレンス・シェア

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 1. はじめに

本稿の目的は、英語の主語の結果性を叙述する他動詞文を再考察し、Levin and Rappaport Hovav (1999) が提案した他動詞主語叙述結果表現が成り立つ条件をまず紹介し、そして、この条件が中国語には適用できないことを明らかにしたいことである。最後に、両言語の主語叙述の他動詞結果表現を語彙概念構造のレベルで表し、中国語のほうが自由に結果表現が成立することを述べる。

## 2. 結果表現

英語における「結果表現」(resultatives)とは、動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じることを表す文である。しかし、結果さえ表せば、どんな表現でも結果表現と呼べるとは限らない。結果表現と呼ばれるには、動詞が引き起こす状態変化をより具体的に描写する「結果述語」(resultative predicate)が主動詞と同じ単文の中になければならないのである。

- (1) a. She broke the vase.  
彼女は花瓶を割った。  
b. She broke the vase to pieces.  
彼女は花瓶をこなごなに割った。

(1a)では broke という動詞は、それだけでも状態変化を表すが、(b)の to pieces という結果述語がなければ、結果表現と呼べない。

- (2) a. He pounded the metal flat.  
彼は金属を平らに叩きのぼした。  
b. He pounded the metal until it became flat.  
彼は金属を平らになるまでたたきのぼした。

(2a)では、動詞 *pound* と結果述語 *flat* が1つの単文に収まっているから結果表現である。これに対して、(2b)のように接続詞を用いて、主動詞と結果述語を別々に表現した複文は、結果表現と見なされない。

上記の他動詞文に加わえて、以下のような自動詞文も結果表現として成立する。

- (3) *The solution in the freezer froze solid.*  
冷凍庫の中の液体がカチカチに凍った。
- (4) *He shouted himself hoarse.*  
彼は喉がカラカラになるまで叫んだ。

結果表現は自他の区別に関係なく成立するが、共通の要素としては、動詞そのものが何らかの状態変化を表す意味を語彙的に持っていることが挙げられる。結果表現のもう1つの特徴は、結果述語が直接目的語のみを叙述するという点である。これは Simpson (1983) が最初に提案した考えで、後に Levin and Rappaport Hovav (1995) によって、「直接目的語の制約」(Direct Object Restriction、以下 DOR) と名づけられた現象である。(1)~(4)では文末にある結果述語(形容詞である *flat*, *solid*, *hoarse*, 及び前置詞句である *to pieces*) はそれぞれ動詞の直接目的語に生じた状態を描写している。DOR に従えば、結果述語は主語や間接目的語、前置詞の目的語などを叙述することができない。

- (5) \**She dyed her hair happy.*  
(6) \**He sent his girlfriend a Valentine's Day gift delighted.*  
(7) \**Dick shot at the quail dead.*

(5)は、彼女が髪の毛を染めた結果として、喜んだ、(6)は、恋人にバレンタインデーの贈り物を贈った結果、恋人が喜んだ、(7)は Dick がうずらに向かって、銃を撃つたと、それぞれの意味を意図して作った作例であるが、結果表現としては成立せず、非文となる。

### 3. 英語の主語の結果性を叙述する他動詞文

前節で、結果表現が一般には主語を叙述しないことを考察したが、最近の研究によれば例外が存在する。例えば、Wechsler (1997) が以下のような反例を挙げている。

- (8) *The wise men followed the star out of Bethlehem.*  
賢人たちが星の位置を頼りに移動し、ベツレヘムを出ていった。
- (9) *The sailors managed to catch a breeze and ride it clear of the rocks.*  
船乗りたちがそよ風を掴み、それに乗って、岩礁から離れていった。

(10) He followed Lassie free of his captors.

彼はラッシーの後について安全な場所へと逃げ出した。

(8)~(10)の例は、下線で引かれている結果述語が、それぞれの動詞の主語を叙述しているところが特徴的である。この例で共通しているのは、状態変化を被るのは直接目的語ではなく、主語であるという点である。厳密に言うと、主語が位置変化を被っているのである。Wechsler(1997)は、直接的に変化を被る事物は直接目的語に具現化されるとは限らず、場合によって主語位置にもマッピングできると述べている。では、なぜ、他動詞文において、主語の結果性を叙述する結果表現が存在するのか。Levin and Rappaport Hovav (1999、以下 LRH と略す)は事象構造の観点から問題をとらえようとしている。

#### 4. 事象構造の観点から

事象構造の観点からの他動性研究において、次の2点が指摘される(Croft 1991: 173)。

- (11) 他動詞文においては、第一の事物から第二の事物へと原動力が伝達される  
(12) 第二事物において、状態変化が起こる。

直接目的語に何らかの状態変化をひき起こす動詞は、全て直接目的語に力が伝達されることを意味する動詞である。

(13) She folded the towel.

第一事物 = She

第二事物 = The towel (タオルに状態変化が起こった)

(13)では、彼女が fold という動作を行うことによって、動作の原動力が主語である彼女から、直接目的語であるタオルに伝わる。そして、力が加わったタオルは、面積が大きいものから小さいものへと変化を成し遂げる。更に、他動詞文における結果述語について、通常、伝達された力を受ける名詞句(NP)が結果述語によって修飾されるという一般化ができる。典型的に、伝達された力を受ける NP が直接目的語として具現化されるので、大多数の結果表現において結果述語が直接目的語を叙述することになる。しかし、非典型的には、伝達された力を受ける NP がない場合、結果述語と主語との間の叙述関係が許される。

では、そもそも、なぜ伝達された力を受ける NP が結果述語によって修飾されなければならないのか。LRH (1999: 18-20)は、その原因は Croft (1991: 173)が提唱している事象の基本的特性にあると提案している。彼女たちの主張を要約すると、(14)~(24)にまとめられる。

(14) 事象の基本的特性 (LRH 1999: 18)

a. a simple event is a segment of the casual network

(単純事象は使役ネットワークの一部分を成す)

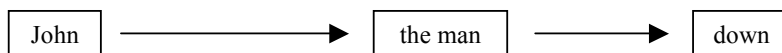
- b. simple events are non-branching casual chains  
(単純事象は枝分かれしない使役連鎖を成す)
- c. a simple event involves transmission of force  
(単純事象において原動力の伝達が行われる)

LRH (1999: 18)では、事物から事物への原動力の伝達は、使役連鎖の一部を表し、また、事物においての状態変化も使役連鎖の一部を表すと記されている(the transmission of force from one entity to another necessarily constitutes a segment of a causal chain, and a change in the state of an entity also constitutes a segment of a casual chain)。伝達された原動力を受ける NP が結果述語によって修飾されなければならない理由は、(b)にある。つまり、単純事象は枝分かれしない使役連鎖を成さなければならないのである。

ここで、John pushed the man down という文を見てみよう。この文は典型的に直接目的語が叙述されるという解釈以外に、主語が叙述されるという解釈も可能である。まず、前者の解釈を見よう。

- (15) John pushed the man down (as a result, the man fell down).

ジョンが男性を押し倒した (結果として、男性が倒れた)。

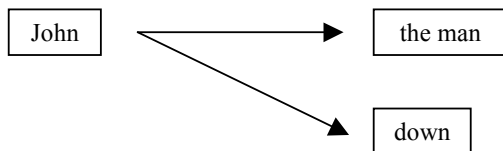


先に見た(11)によると、John pushed the man という行為が、第一事物である John から第二事物である the man へと原動力が伝達されることを表す。そして、この原動力の伝達は使役連鎖の一部を表す。また、これによって、男性が起きたという結果事象が同じ使役連鎖の一部を成し、状態変化を表す。この状態変化が原動力の伝達を受けた NP(the man)において行われるので、結果事象が行為事象のすぐ後に続く。

次に、主語が叙述されるという解釈になる場合を見よう。

- (16) \*John pushed the man down (as a result, John fell down).

\*ジョンが男性を押し倒した (結果として、ジョンが倒れた)。



(15)と同じように、John pushed the man という行為が、第一事物である John から第二事物である the man へと原動力が伝達されることを表す。しかし、down が主語を叙述するということになると、John が落ちたという結果事象が行為事象から枝分かれしなければならなくなる。状態変化が、原動力の伝達を受けた NP(the man)において行われなければならないからである。

これは、Croft (1991: 173)の事象の基本特性に反しているのも、よって、(16)は結果述語が主語を叙述するという解釈が不可能である。

(16)は、述語がどのような場合において、主語を叙述できるかを明示している。つまり、動詞が直接目的語への原動力の伝達を意味しない場合、結果述語が主語を叙述することができる。この場合においてのみ、事象の枝分かれが行われず、主語を叙述する解釈も阻まれないからである。これが、主語の結果性を叙述する他動詞文の1つの特徴である。

主語の結果性を叙述する他動詞文のもう1つの特徴は、このような表現においては、2つの事象が同時に展開されなければならないという制約である。例えば、

(17) The wise men followed the star out of Bethlehem. ((8)の再録)

(17)では、賢人たちが星の位置を頼りに行動することと、ベツレヘムを出ていったという結果が同時展開している。一方、目的語を叙述する他動詞結果表現においては、このような制約が見られない。

(18) We all pulled the crate out of the water. (LRH 1999: 12)

(19) The police shot the robber to death. (LRH 1999: 12)

(20) He hammered the metal flat.

(18)は(17)と同様に、2つの事象が同時展開しているが、(19)と(20)では、2つの事象が同時展開していない。

更に、事象が同時に展開する必要がある結果表現(主語叙述結果表現および目的語叙述結果表現)においては、結果述語が常に状態ではなく、結果位置を表している。

(21) He followed her into the house.

彼は彼女の後について、家の中に入った。

(22) She chased the butterfly out the window.

彼女は蝶々を窓の外に追い出した。

(23) \*We all pulled the crate tired.

私たちは箱を引っ張って、疲れた。

(24) \*The wise men followed the star to exhaustion.

賢人たちが疲れるまで星の位置を頼りに移動した。

## 5. 中国語にける主語の結果性を叙述する他動詞文

本節では、英語における主語の結果性を叙述する他動詞文に対応する中国語の結果を表す複合動詞について考察する。英語の結果表現を中国語に訳すと、たいていの場合、結果を表す複合動詞で、言い表せるからである。たとえば、(2)~(4)で示した英語の結果表現の中国語訳は次のようになる。

(25) He pounded the metal flat.

彼は金属を平らに叩きのばした。

他 把 金属 敲 平 了。

Tā bǎ jīnshǔ qiāopíng le.

彼 BA<sup>1</sup> 金属 敲く 平ら LE<sup>2</sup>.

(26) The solution in the freezer froze solid.

冷凍庫の中の液体がカチカチに凍った。

冰库 里的 液体 结冻 了。

Bīngkù li de yètǐ jiédòng le.

冷凍庫 中 -DE<sup>3</sup> 液体 凍る LE.

(27) He shouted himself hoarse.

彼は喉がカラカラになるまで叫んだ。

他 喊 哑 了 喉咙。

Tā hǎn yǎ le hóulóng.

彼 叫ぶ カラカラ -LE<sup>4</sup> 喉。

上記の例では、いずれも“敲平”、“结冻”、“喊哑”という複合動詞の後項述語が結果性を表している。さて、中国語の結果を表す複合動詞では、DORに従わない例文が見られるだろうか。周&張(2006)の調査研究によると、『汉语动词—结果补语搭配词典』(王砚农、焦群、庞颀：1987)の中から抽出した340例中、DORに従わない例はその数が89例(26%)で、少数派であるということである。このことはDORが全ての結果表現に適合するには至っていないことを意味している。

中国語においては、DORに従わないものは大きく2種類に分けることができる<sup>5</sup>が、ここで注目したいのは後項が主語と叙述関係を持つタイプで、特にV1が他動詞である表現である。このタイプは英語の主語の結果性を叙述する他動詞文に似ているタイプなので、両言語を比較して、英語と中国語の結果表現の仕組みを明らかにするには適していると思われる。では、V1が他動詞であって、DORに従わない複合動詞の例を見よう。

<sup>1</sup> BA は、「～を」という意味の前置詞で、その後に続く目的語をどう処置したかを強調する。

<sup>2</sup> LE は、結果相を表す。

<sup>3</sup> -DE は、日本語の「の」にあたる連体修飾助詞である。

<sup>4</sup> -LE は、アスペクト助詞、実現相を表す。

<sup>5</sup>後項が主語と叙述関係を持つタイプ及び後項が前項と補文関係を持つタイプに大別される。周&張(2006)を参照されたい。

- (28) 吃饱: 今天的菜太少, 我没吃饱。  
 chībǎo: Jīntiān de cài tài shǎo , wǒ méi chībǎo .  
 今日のおかずが少なすぎて、お腹いっぱいにならなかった。  
 Eat Full: There were too few dishes today, I didn't eat enough.
- (29) 学膩: 这孩子没有出息, 不管学什么东西, 学不到  
 xuéni: Zhè hái zi méiyǒu chūxi , bùguǎn xué shénme dōngxi , xuébudào  
 三天就学膩了。  
 sān tiān jiù xuéni le .  
 この子は進歩しないわ、何を勉強しても三日坊主。  
 Learn Bored: I have given up on my son, he can't stick to any learning activity for more  
 than three days.
- (30) 喝醉: 他喝醉了, 躺下就睡着了。  
 hēzuì: Tā hēzuì le , tǎngxià jiù shuìzháo le .  
 彼は酔っ払って、横になったら、すぐ眠りに入った。  
 Drink Drunk: He got drunk and fell asleep the moment he lay down.
- (31) 抱累: 这孩子太重了, 我抱累了。  
 bàolèi: Zhè hái zi tài zhòng le , wǒ bàolèi le .  
 この子は重過ぎる。もう疲れた。  
 Carry Tired: This child is too heavy; I am tired (from carrying him).
- (32) 听烦: 这件事她唠叨了多少遍了, 把我都听烦了。  
 tīngfán: Zhè jiàn shì tā láodao le duōshǎo biàn le , bǎ wǒ dōu tīngfán le .  
 このことは彼女が何回も繰り返しているから、わたしはもう聞き飽  
 きた。  
 Listen Annoyed: She has been repeating this for some many times, I am already sick of  
 hearing it.

英語の主語の結果性を叙述する他動詞文は2つの特徴があることを見てきた。つまり、第一に主語の結果性を叙述する他動詞文は、直接目的語に原動力の伝達が行われない場合のみ可能であることと、第二に主語の結果性を叙述する他動詞文においては、2つの事象が同時に展開されなければならないことである。上記の例を見ると、この2つの特徴は両方とも中国語に当てはまるとは限らないことがわかる。

まず、第一の特徴については、英語の場合と同様に、直接目的語に原動力の伝達が行われないことが見受けられる。“吃”、“学”、“喝”、“抱”、“听”という動作動詞が、直接目的語に何らかの状態変化を引き起こすわけではないので、直接目的語に力が伝達されること

を意味するとは言えない。

(33) 推 开: 他推开门。

tuīkāi Tā tuī kāi mén.

(28)~(32)の“吃”、“学”、“喝”、“抱”、“听”は、(33)のような直接目的語叙述表現と比較すると、(33)では、“推”という行動を行うことによって、ドアが開いたという状態変化が起こる、が、〈吃、学、喝、抱、听〉は直接目的語に力が伝達されない。すなわち、中国語にも第一の特徴が当てはまる事が分かる。

ところが、第二の特徴、二つの事象の同時展開は中国語には当てはまらない。“吃”、“学”、“喝”、“抱”、“听”という行為と V2 が表す結果状態が同時に展開していないのである。V2 が表す行為が時間的にある幅を要求する行為であり、むしろ V1 という瞬間的に発する動詞と同時に展開することが不可能である。これは英語の The wise men followed the star out of Bethlehem の結果表現と異なると言えよう。

## 6. 語彙概念構造でみる英語及び中国語の結果表現

英語と中国語において、どうしてこのような差異が出るのだろうか。語彙概念構造での枠組みで両言語において主語の結果性を叙述する他動詞文を見てみれば、その原因が分かる。まず、語彙概念構造で用いる述語や項の意味を簡単に説明すると、以下のようになる。

x = 動作主

w = 手段

φ = 様態

z = 場所・結果

GO WITH = 共に移動する

CAUSE = 使役

BECOME = 起動

BE = 状態

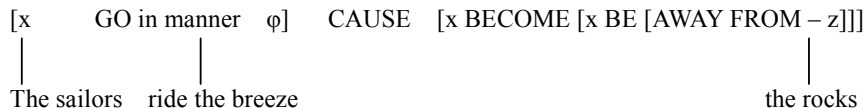
AWAY FROM = ~から離れる

まず、(8)~(10)の英語の例を以下の語彙概念構造のようになると想定する。

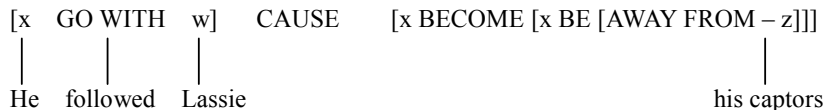
(34) The wise men followed the star out of Bethlehem.

[x		GO WITH	w]	CAUSE	[x BECOME [x BE [AWAY FROM - z]]]
The wise men	followed	the star			Bethlehem

(35) The sailors managed to catch a breeze and ride it clear of the rocks.



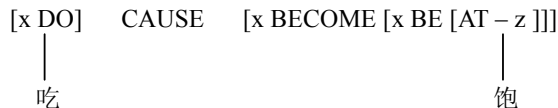
(36) He followed Lassie free of his captors.



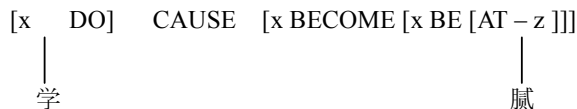
語彙概念構造を見ると、動詞の意味が移動の意味に限定されることが分かる。また、GO WITH や GO in manner といった意味述語を使えば、主語の結果性を叙述する他動詞文においては、なぜ2つの事象が同時に展開されなければならないのかという特徴があるのか説明できる。それから、結果述語がなぜ常に結果状態ではなく、結果の位置を表しているのかも説明できるだろう。つまり、動詞が表そうとしている行為は、ある場所から他の場所への移動であるから、結果的に位置でなければならないのである。

一方、中国語の(28)~(32)の例の複合動詞の語彙概念構造も想定して、書いてみよう。

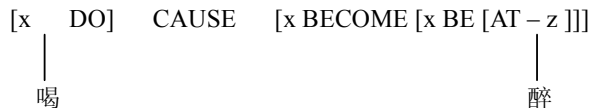
(37) 今天 的 菜 太 少，我 没 吃饱。



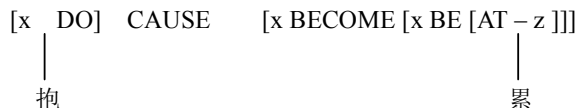
(38) 这 孩子 没有 出 息，不 管 学 什 么 东 西，学 不 到 三 天 就 学腻 了。



(39) 他 喝醉 了，躺 下 就 睡 着 了。



(40) 这 孩 子 太 重 了，我 抱累 了。





## 参考文献

- 秋元淳. 1998. 「語彙概念構造と動補複合動詞」 『中国語学』 245 号, 32-41.
- Charles N. Li & Sandra A. Thompson. 1976. "Subject and Topic: A New Typology of Language." In: Charles N. Li (ed.). *Subject and Topic*. London /New York: Academic Press, pp. 457-489.
- Cheng Lisa Lai-Shen. 1997. "Resultative Compounds and Lexical Relational Structures", *Chinese Languages and Linguistics III: Morphology and Lexicon*, Symposium Series of the Institute of History and Philology, Academia Sinica, Taiwan, 167-197.
- Croft, W.A. 1991. "*Syntactic Categories and Grammatical Relations*," University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Huang C.-T. James. 2005. "Resultatives and Unaccusatives: A Parametric Approach", 日本中国語学会第 55 回全国大会予稿集
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) "*Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*", MIT Press, Cambridge, MA.
- Li Ya Fei. 1990. "On V-V Compounds in Chinese", *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 177-207, Kluwer Academic Publishers.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 影山太郎、由本陽子. 1997. 中右実編『日英語比較選書 8—語形成と概念構造』 研究社出版
- 影山太郎. 2001. 「結果構文」 影山太郎(編) 『日英対照—動詞の意味と構文』 6: 154-181 大修館書店
- 久能彰. 2002. 「日英語の結果構文と非対格性」 久野暲・高見健一(編) 『日英語の自動詞構文』 7:357-393 研究社
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1999. "*A Reevaluation of The Direct Object Restriction on English Resultatives*," unpublished ms., Bar Ilan University and Northwestern University, Ramat Gan, Israel and Evanston, IL.
- Simpson, J. (1983) "Resultatives", in L. Levin, M. Rappaport and A. Zaenen, eds., *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, IN.
- 周 イイン、張 琳. 2006. 「中国語の結果を表す複合動詞に関する考察—日中対照の視点から」 東京外国語大学卒業研究
- 湯廷池. 1992. 「漢語術補式複合動詞的結構、功能興起源」 『漢語詞法句法四集』, 95 – 165. 台湾学生書局
- 湯廷池,張淑敏. 2001. 「次要謂語的研究：漢語對比分析」 『第 5 屆國際電腦多媒体語文教學研討會論文集』
- Verspoor, C.M. 1997. "*Contextually-Dependent Lexical Semantics*," Doctoral Dissertation, Center for Cognitive Science, University of Edinburgh, UK.
- Wechsler, S. 1997. "Resultative Predicates and Control," *Texas Linguistic Forum 38: Proceedings of the 1997 Texas Linguistics Society Conference*, Austin, TX, 307-321.